慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロジェ・ ガロディ著 疎外論
Sub Title	Roger Garaudy ; Humanisme Marxiste, cinq essais polémiques
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.11 (1959. 11) ,p.998(64)- 1003(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19591101-0064
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19591101-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ことはできないとして、「むしろすべてが社会保険といいうるかも知れない」（七二頁）とも記述せられているが、これまた一考せしめられるところであろう。

本書は平明・穏健に書かれてあり、しかも理論的にもきわめて秀れ、かつまた複雑なる社会保障を体系的に整理して述べられている。一向に激しい調子や苛烈な文言を弄しないで、そして簡易な表現によって、学問的に、読者をして、その主張を承服せしめると云った書物である。著者の期待されたような「社会保障の本質を理解するための手引となり、さらにつき進んだ専門的研究への機縁」（序二頁）とは、十分になりうるものである。

（著者は大阪大学教授、経済学博士、本書は社会諸学基礎講座9、序二頁、目次三～一〇頁、本文一三～二八五頁、索引二八七～二九六頁、昭和三三年四月一〇日初版発行、三八〇円、評論社）

（庭田範秋）

ロジェ・ガロディ著

『疎外論』

（Roger Garaudy; Humanisme Marxiste, cinq essais polémiques, 1957.）

マルクスは、その娘イエンニイのたわむれに出した質問書に〃あなたの格言は？〃と問われて、〃非人間的なものは私に縁がない〃と答えたと伝えられる（「告白」）。一八四四年の「経済学・哲学に関する手稿」において、「疎外された労働」と題して自己疎外の現象を詳しく分析して以後、マルクスは疎外について触れることが比較的少なかったけれども、彼の瞳の中心は、常にその社会に働く具体的な人間の姿に注がれていた。今日資本主義の新しい段階において、個性の喪失、生存のロボット化、組織化、大衆化、画一化など正常の生活そのものが病的となる傾向がますます進み、実存主義、大衆社会論や宗教までが疎外を重要な問題としている時、マルクスの疎外論も新たな関心をもって検討されねばならない。ここに取り上げたガロディの書は、

Introduction: Pourquoi je suis marxiste.

I. De l'aliénation.

II. Dialectique de la nature et matérialisme.

III. Dialectique et liberté.

IV. Des intellectuels.

V. Qu'est ce qu'un parti ouvrier révolutionnaire?

の諸論文を集めたものであるが、「疎外論」が最も長く、かつ重要な位置を占めている。ここでは「手稿」や「資本論」の説明は省略して、彼の積極的な主張を主に紹介しよう。

*

疎外――一八四四年の手稿から《商品の物神性》へ、マルクスの思想における統一又は分裂――疎外の恢復と実証

主義の批判――マルクスの「経済学批判」とレーニンの「哲学ノート」における人間と物の関係の分析――ブルジョア社会における人間の《状況》と内在する弁証法――共産主義は全ての疎外を克服するか？　リカードゥ経済学とヘーゲル哲学に対するマルクスの批判の類似――R・P・ビゴの研究「マルクス主義とヒューマニズム」に対する回答――マルクス主義、完全なヒューマニズム

《Être radical, c'est prendre les choses par la racine. Or, pour l'homme, la racine c'est l'homme lui-même.》（Marx）

マルクスの出発点は人間であり、資本主義経済における人間の状況である。この状況の内部にある弁証法は、一方で人間の破滅、非人間的な論理への従属を生み、また同時にこの状況を克服する条件を生み出す。そして人間は、経済を支配し、おのずと自由な創造にまでいたるであろう。これがマルクス哲学の展望の核心である。

マルクス経済学は商品の分析から始めるが、マルクス哲学においても同様である。二つは元来つながっていて、マルクス哲学の鍵は経済学の中にあり、マルクス経済学は唯物弁証法の哲学をはなれては理解されない。マルクス主義は、マルクスがこの相互依存を意識した時に生まれたのである。この二つは人間を物との関連において考察する点で共通する。

ブルジョア経済学は、この世界を始めから与えられたものとし、その諸関係を発見し不変のものを取り出すことで満足するが、このような実証主義に対して、マルクス経済学はその産物についてもその幻影についても、その根源まで探究する。

《競争の領域は、個別的に考えると偶然に支配されている。それゆえ、この偶然の中で確認される内在的な法則や秩序は、この偶然が数多く集められた時にだけ姿を現わすにすぎない。それぞれの生産の行為者は、それを見ることも理解することもない。》（マルクス）

ここから、マルクスが初めの著作で《疎外》と呼び「資本論」で《物神性》と呼んだものが生まれる。交換において、人々は互いに独立のものとして現われるけれども、彼らを結び付ける市場においては、この外見上の個人的独立は、個人が望んだのではなく従って物によって課せられたようにみえる従属と衝突する。

ここで、混乱を避けるために、二つの注釈を加える方がよかろう。

(a)《疎外》と《商品の物神性》を単に同一視することで満足することは出来ない。前者は後者より広い意味を持っている。宗教的、政治的、イデオロギー的などの疎外があるが、《商品の物神性》は、その一つ、経済的疎外に当たるだけである。ここでは資本主義社会における経済的疎外に限るけれども、階級なき原始社会の疎外の形態と起源は何か、一体疎外といえるようなものがあるのか、というような問題の検討は興味深い。

(b)疎外とは、人間の一状況であると同時に、この状況が生み出した幻影 illusion である。このあいまいさを避けるために、幻影だ

けについて云おうとする時は《疎外の観点》と云う。

疎外論は、近年しばしばマルクス主義の誤解をもたらした。最近の「マルクス主義とヒューマニズム」におけるR・P・ビゴの例をとり上げよう。

ビゴはマルクス主義の三つの本質的面を認識した功績がある。

1　マルクス主義はヒューマニズムである。それは人間を支配する経済界における人間の状況を分析し、いかにそれが弁証法によってこの人間の疎外を終らせるかを示している。

2　ビゴは《若きマルクス》を資本論と成熟期のマルクスに対立させるという無獣な試みを繰り返さないで、逆に、マルクスの著作における深い一貫性と統一に注目している。

3　この二つのことから、マルクスの政治経済学と認識論は相互に依存している。

マルクス主義の意義を理解するためのこの賞讃すべき努力にも拘らず、ビゴは、彼の著作全体に霊感を与え、しかも彼のマルクス主義解釈を全く損ねた二つの《ア・プリオリ》にとらわれていた。すなわち

1　科学についての実証主義的考え

2　道徳についての超越主義的考え

この二つについて彼をとがめることは出来ない。カソリック信者、特に牧師は、神の絶対、超越性抜きに道徳を考えることは不可能である。その上、科学における実証主義者の不可知論は、科学と宗教の《平和的共存》を確保するのに最も適当な概念だと近年ますます考えられるようになった。

ここから、ビゴの全てのマルクス主義評価が生まれる。それは三つに分けられる。

1　《マルクス主義経済学は……一つの形而上学である。》

これは実証主義者の見解である。彼にとって、純粋な経験主義でないものは形而上学である。実証主義者流に科学を定義して、ビゴは《マルクス経済学は科学ではない》と結論する。彼は実証主義者の公準を疑わない。マルクスは、実証主義に対するマルクス主義の批判の基礎となった疎外の批判によって、その空虚さを示した。

2　《マルクス経済学は倫理である。》

ビゴによれば、マルクスは道徳家である。彼は資本主義社会の発展の必然的法則を発見したのではなく、人間の《要求》を人間の絶対、永遠な概念の名で述べた。疎外論は彼にとっては道徳上の現象であり、マルクスはヘーゲルの絶対精神のドラマを歴史的社会的ドラマに置き換えたに過ぎない。《精神現象学は労働の現象学に、人間疎外の弁証法は資本の弁証法に、絶対理性の形而上学は絶対共産主義の形而上学に変えられた。》

かくして《マルクスはその全生涯を通じてヘーゲル主義者であった。》疎外の克服を人間に関する形而上学から生まれた道徳的要求とすることによって、ビゴはその本質を忘れている。

(a)疎外とは人間一般の疎外、永遠の《人間性》の形而上学的現

範の一種ではない。この非難はフォイエルバッハに向けられ、それを非難したものこそマルクスであった。商品経済の中に生まれ、資本主義制度のプロレタリアの疎外された労働においてその完成した形態に達するような労働の疎外が問題なのである。疎外は永遠のカテゴリーではない。

(b)疎外は精神の現象ではない。この非難はヘーゲルに向けられ、それを非難したものこそマルクスであった。ヘーゲルのような観念論者の体系における要求は問題ではなく、具体的な現実、即ち資本主義経済における商品と流通、貨幣とその資本への転化などが問題なのである。疎外は、抽象的な、ア・プリオリな範疇ではない。

(c)疎外は人間の労働と実践に苦痛を与える避け難い不幸ではない。それは歴史的現象であって、一定の生産様式に結び付いており、それを生み出した経済条件の破壊と共に消滅する。マルクスはグレイやロードベルツスのような空想的社会主義者とは異なって、リカードゥ理論を社会主義的要求に逆用することに満足しなかった。この点でマルクスはプルードンを非難する。それ故、マルクスの理論はビゴの云うような《規範的》な性格は持っていない。

3　《マルクス主義は宗教である。》

ビゴは超越的な概念をマルクスに帰し、そこにマルクス主義の不快な面を見る。マルクス主義は宗教であり、しかも誤った宗教である。それはキリスト教の戯画であり、彼はそこに創世、原罪、啓示、楽園の消失と復活、《パウロの説》をも見出す。《プロレタリアは、キリストのごとく歴史の中央に位する。》

この実証主義的、神秘的な議論は、ブルジョア経済学とブルジョア哲学に対するマルクス主義の二重の批判を受ける。

マルクスのブルジョア経済学の批判は、実証主義の批判である。《経済学は疎外された労働の法則を述べただけだ》とマルクスは云う。経済学におけるこの疎外の批判が、科学一般における実証主義批判の出発点である。経済学と私有財産は同じ疎外の産物であって、ブルジョア経済学にとって私有財産は絶対であった。その観点は疎外の観点であり、それは全く疎外された思想の中にとどまる。それは外観を見るだけであって、それが《疎外された》意味では《客観的》である。ブルジョア経済学者は《関係》を《物》に変え、この関係の歴史的、一時的性格を見ない。

われわれが弁証法の性質を考える時、経済学の批判は哲学の批判において明らかとなる。

リカードゥの経済学が資本主義制度の実際のある矛盾を発見したと同じように、ヘーゲルの哲学は人間の状況とその思惟におけるある基本的矛盾を発見した。マルクスにとっては、それを包み隠している疎外と神秘化から《合理的核心》をとり出すことが問題なのである。

《ヘーゲルは近代経済学の観点に立つ》とマルクスは書いた。このブルジョア経済学の《観点》がいかにマルクスのプロレタリアの

《観点》と対立するかを理解するためには、これが(1)ブルジョアの観点であり、(2)疎外の観点であり、(3)神学の観点であることを考えればよい。

ヘーゲルは全ての古典派経済学、ブルジョア・イデオロギーと同様に、私有財産、さらに国家や法律さえも自然なものと考えた。そして《哲学――疎外された人間の抽象形態――は、それ自身を疎外された世界の規範とする》(マルクス)。ヘーゲルの全哲学は、ブルジョア階級の限界の中でのみ運動するのである。商品経済がその最も抽象的な表現を商品の最も普及した時代の貨幣に見出すと丁度同じように、ブルジョア社会とそこから抽象された思想はその最も完全な表現をヘーゲルの論理学の体系の中に見出す。《論理は精神の貨幣である》(マルクス)。A・スミスが経済学のルーテルであると同じく、ヘーゲルは哲学のルーテルである。

*

ガロディの論点は、主として次の五つに分けられよう。

(1)マルクス主義の性格、その疎外論の説明
(2)疎外論によるブルジョア実証主義の批判
(3)マルクス主義における哲学と経済学の関連の強調
(4)以上の三つによるビゴの評価と批判
(5)マルクス主義がヒューマニズムであることの主張

最近のフランスにおけるマルクス研究は、賛否いずれを問わずヒューマニズムの観点が強く、初期マルクスの思想から一貫してマルクスの人間観を理解しようとする傾向があり、ガロディもその例外ではない。それはもちろん意義ある試みというべきだが、以下に私のいくつかの疑問を述べておこう。

一、マルクスにおいて、哲学は経済学の前提となり、導きの糸として貫かれたとしても、その具体的な内容は経済学の本格的研究以後も同じであるかどうか。「ヘーゲル法哲学批判序説」においては「聖ではない形での自己疎外の仮面をはぐことが、歴史に奉仕する哲学の任務である」と規定されているけれども、このような哲学観は、後期にはどのようになったか。

二、物神崇拝は疎外の一つの現われには違いないが、経済的疎外＝物神崇拝と単純に考えてよいかどうか、マルクスの思想の発展の上で問題であろう。遊部教授によれば、疎外論は、マルクス経済学そのものの萌芽を意味するというよりは、史的唯物論を媒介として経済学の方法論を用意した。また「一八四〇年代においてはいまだに商品生産と資本主義生産との関係を解明はもとより、問題意識すらしていなかった。」「疎外論における展開をのちの『資本論』の平面にまでひきあげて理解し、こんどは逆に後者の展開の『萌芽』を前者のうちに見出すのは無意味である。」(遊部久蔵「疎外論の経済学的意義」「三田学会雑誌」五二巻一号)後期においてマルクスが疎外についてあまり触れないのは、何故か。

三、ガロディはビゴがマルクスの著作における一貫性と統一に注目したことを賞讃するが、ビゴの意図はマルクスの経済学の体系を

もヘーゲル的世界の中に限定することであった。従ってヘーゲル化したマルクスの戯画を批判するためには、初期マルクスからの一貫性を賞讃するよりは、初期以後の発展を、《哲学者マルクスから経済学者マルクスへの転換》の意義を重要視するべきであろう。

四、結局、マルクス主義をヒューマニズムとして主張する場合、今日の倫理的なヒューマニズムとの差のみでなく、マルクス自身の初期の思想(der durchgeführte Naturalismus oder Humanismus)との重要な相違が明らかにされねばならない。

(白井　厚)

K・K・クリハラ著『経済発展のケインズ理論』

(Kenneth, K. Kurihara; The Keynesian Theory of Economic Development. 1959.)

一

経済発展に関する理論的研究は、すでにスミスやマルサスの様な古典派経済学者の中に、その先駆を見出すことができる。しかしケインズ以後、ハロッド及びドマールの理論を出発点としてケインズ理論の長期動態化の努力と共に理論的体系を確立した経済成長の理論と、一方において、国連報告やヌルクセの貢献を始めとして後進諸国の経済開発ないし発展に関する理論的研究が展開されている。そしてこの経済成長の理論と後進国経済発展の理論が、戦後、経済発展に関して著しく関心の度を高めた二つの理論的分野であろう。ところで成長理論を取り扱う研究の多くが先進国経済のヴィジョンに立脚して分析を展開する傾向にある。この視野の狭さが、結局人口過剰をその基本的特徴とする後進国経済に対して実践的指導理念とはなり得なかった、と云う欠陥を招くに至った。その欠陥の第一は、殊にドマールに見られるのであるが、労働人口の成長率に関して explicit な何らの仮定もなく、従って完全雇用維持の条件が単に資本の側から捉えられているに過ぎないということ、いい換えれば投資の二重性によって保証される条件は資本の完全利用であって、労働の完全雇用ではないと云うことである。その第二は、たとえハロッド及びハンバーグに示される如く、労働人口の成長率に関する explicit な仮定を立てたとしても、労働の完全雇用成長率と資本の完全利用成長率との均衡をもたらす何らの explicit な政策変数の導入を行なっていないと云うことである。従ってそこから導き出された帰結は、すべて現実における均衡成長の不安定性を指摘するに留まる。

二

ここに紹介するK・K・クリハラの著書 The Keynesian Theory